



オリンピックに続き、パラリンピックが開催されています。障害者と言っても、様々な障害があります。また、普段見ている競技が障害者用に変更されていたりと、オリンピックとは違う楽しみ方が出来ます。選手の皆様にケガや事故の無い様、お寺からお祈りしています。

多様性 ～障害者もいる世界～ 良啓

知的障害者施設と二十年以上の交流があります。始めの頃は、職員さんの草野球チームのメンバーに混ぜて頂き、ユニフォームまで作りました。ただし、野球は下手でしたので、戦力にはなりません。また、定期的にお寺の本堂床のワックス掛けを利用者さんにして頂き、お陰様で床はいつも綺麗です。有り難い事です。

さて、施設の年中行事に参加すると、毎回感動のあまり、泣いています。利用者は、常に全力で真剣です。自分の持てる力、知識を総動員して、目の前の事に集中します。出来たら大喜び、出来なければ本気で悔しがります。人目をはばからず、自分を表現します。

「自分の力で生きている。」
そう感じると、思わず涙が頬を流れます。

この様に接するまで、私の生活圏に障害者と関わる事はほとんどありませんでした。初めて施設を訪れた際、奇声を発したり、妙に近距離で話しかけてきたので、困惑しました。でも、向こうからすると、見たことない人が入ってきて不安だったと思います。知らない人に興味があり、話しかけてきたと思います。後から冷静に考えると至極当然の反応です。最初の反応は、障害者に対する無知が原因と反省するばかりです。

とは言え、いきなり「障害者を受け入れてください。」とは言いません。ただ、障害者を知ってください。彼らが日頃の様な生活を送っているのか。趣味や特技は何か。相手を知り、自分を知ってもらう。その様な交流が大切と実体験から思います。

お釈迦様は、苦しみの原因は「無知」である。と説いています。知らない事は、恐れを生み、人生の苦しみに沈んでしまいます。先ずは知る為には、オリンピックを観戦されてみては如何でしょうか？

知ることの大切さ 寺務員 新垣

「障がい」を大きく分けると、身体・知的・精神・発達・難病があります。街中やテレビで、手話で話す人、車椅子で行動する人、文字の読み書きができない人、物忘れが多い人、突然怒り・暴力を振るってしまう人、コミュニケーションを取る事が難しい人、特別な支援が必要な人、精神疾患がある人など、見たこと、聞いたことあると思います。実際彼らに出会った時、どのような接し方をしたらいいかわからない、と思っている方もいるでしょう。私も彼らについて学ぶまでは同じことを思いつつも、笑顔と言葉だけは慎重に意識しながら接してきました。

私は今、発達障害について学んでいる最中なので、多くを語ることはできません。そこで、今回は2冊の自叙伝を紹介させて頂きたいと思います。見ただ目では分からない発達障害についてや当事者目線で見た周りの行動、障がいの特性、こんな接し方をしてほしい等が語られていますので、パラリンピックを見ると共に、当事者の思いが伝わられた本を手に取り、「障がいの特性」「生きづらさ」「困難を持つ方への接し方」を知って頂けたら幸いです。

一冊目は、ゴトウサンパチ著「先生がアスペルガーって本当ですか？」です。幼い頃から周囲とのトラブルが絶えず、学習面(AD)学習障害)や行動面(CAD)注意欠如多動障害)での困難を抱えながらも、良き理解者と出会い、心を支えられながら中高大学を卒業し、公務員として働いている。36歳の時にアスペルガー症候群と診断され、カミングアウトするも受け入れてもらえなかった。しかし講演活動を通して彼の言葉を必要とする方々が増えていく。様々な人との出会いと発達障害と共に生きるゴトウ氏の半生を綴った自叙伝である。

二冊目は、南雲明彦著「D(学習障害)は僕のD字が読めないことで見えてくる風景」です。小さいころから文字が滲んだり揺らいで見えることで勉強ができず、試験でも解答枠の大きさを測り、どこまで曖昧な文字を書けば点数を貰えるかを研究していた。読み書きが出来て当たり前の学校生活に苦しみ、不登校・脅迫障害・うつ病を発症する。カウンセラーに言われた「自分の力を信じてあげなさい」という言葉から彼の人生が変わっていく。21歳の時に「ディスレクシア」を知り、子供たちに自分と同じ苦しい思いをさせたくないと強く思い、講演活動を始める。「生きづらさ」から見えてくる風景を書き綴った自叙伝である。

